昭和61年(1986年)7月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)

7　JULY, 1986　毎月10日発行　第75号

教皇様の声

神は霊である

信仰と道徳シリーズIX

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1986
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

1　「神は霊である。」主イエズス・キリストがこのように宣言されたのは、シカルのヤコブの井戸の傍でサマリアの婦人とお話になったときでした。

今回このお言葉の光の下で、「私は神を信じます」という信仰宣言の最初の真理について話を続けましょう。特に第一バティカン公会議の憲章『デイ・フィリウス』の教えを参照して行きたいと思います。第一章は「万物の創造主である神」についてです。自らをお示しになったこの神は、「預言者を通じて語られ、そして最後に……御子を通じて語られました。」(ヘブライ1・1)「この世の創造主であられる方はお造りになったこの世とは本質的に異なる御方です。」神は永遠であり、一方すべて造られたものは事情次第で変化するもの、時の支配を受けるものであります。

2　私たちが信じる神は永遠であるゆえ、神は「生命の充満」であって、目に見える世界に生きるすべてのものとは区別されるべき御方です。霊、純粋な霊である神について「生命」と言うとき、この語は最高の意味で理解されなくてはなりません。第一バティカン公会議が教えるように、神は無限であって目には見えないのです。造られた見えるものの世界の基準や、人間の生命の行程をはかる時間といった基準で計れるようなものは、なに一つ、神の中に見つけることができません。神は物質を超えたものであり、完全に「非物質的」であるからです。しかしながら、聖なる存在が霊であるとは、物質でないと言うほかはないような消極的な方法に限られているというわけではありません。実際、ナザレトのイエスがサマリアの婦人に「神は霊である」(ヨハネ4・24)とお答えになった時のように、肯定的な方法によって、神という存在は霊であることを知るようになるのです。

3　第一バティカン公会議の文書を参照すると、神についての教義が確認できます。神について教会が信じ宣言している根本的な主張とは、「神は唯一無類、全く単一で不変の霊的実体であり」、「神は知恵と意志とすべての完全性において無限の御方である」という二点です。

神は霊であるという教えは啓示によって伝えられましたが、この文書のなかでは、存在という専門語をつかって記されてあります。すなわち、「霊的実体」という表現。「実体」という語は存在の哲学の用語であり、この句によって公会議文書は、神について次のように述べようとしているのです。つまり、神はその本質によって全被造物の世界とは区別され、自立する存在であるばかりでなく、自立する霊でもある、と。神という存在は、それ自身の本質から言って絶対的に霊的なものなのです。

4　霊であるとは、知恵と自由意志を備えていることを表わします。神は無限の英知(知性)であり、意志であり、自由であります。それは、神がすべての完全性において限りない御者であるのと同様です。

神についてのこうした数々の真理は、聖書や聖伝に見出される啓示によって実際に幾度も確証されています。さし当たり、神という存在の限りなく完全な知性を強調している箇所を聖書から引用してみましょう。神の限りなく完全無欠な自由と意志については、次の機会に譲ることにします。

まず第一に思い出されるのは、聖パウロのローマ人への手紙の中の感嘆の叫びです。「ああ、神の富と上知と知識の深さよ！　その裁きは計り知れず、その道はきわめ難い。主の思いを知ったものがいるか。」(ローマ11・33以下)

この使徒の言葉は、旧約聖書の知恵の書の教えをエコーのように鳴りひびかせます。「(神の)知恵ははかりがたい」と詩篇146(147)・5は宣言しています。神の尊厳は、その知恵と一体であります。「主は、偉大なもの、大いにたたえるべきもの、その偉大さは、計り知れない。」(詩篇144(145)・3)「その上には何一つ切りとることもつけ加えることもできない。主の不思議を見つける方法はない。人が知りつくしたと思う時、そこが始まりであり、人がそれをし終えた時には、何もわからなくなる。」(シラの書18・5〜7)　そこで賢人は、「主はそのみわざのすべてを超えるものである」(同43・28)と言うことができ、そして「主はすべてだ」(同43・27)と結論するに至るのです。

知恵の書の著者たちが神について三人称の「彼」を用いているのに対し、預言者イザヤは一人称の「私」を使って語っています。イザヤは自分に霊感を与える神御自身に語らせるのです。「天が地よりも高いように、そのように私の道は、あなたたちの道より高く、私の考えは、あなたたちの考えよりすぐれている」(イザヤ55・9)と。

5　神の「御考え」と神の「知識と知恵」という表現のなかに、神の存在は限りなく完全無欠であることが示されています。その限りない知恵により、神以外の存在するものすべてに超えて、神は崇高であります。いかなる被造物といえども、とりわけいかなる人間であろうと、神のこの完全性を否定することはできません。「だが人間よ、神に口答えするあなたは何者か。造られた者が造ったものに向かって『どうしてあなたは私をこのように造ったのか』と言えようか。つぼ造りは土くれの主人ではないのか」(ローマ9・20)と聖パウロは問いかけています。このような考えと表現法は、旧約聖書から引き継がれました。これと同じような問いと答えを、イザヤの書(29・15、49・9〜11参照)とヨブの書(2・9〜10、1・21参照)に見出すことができます。第二法の書は、「われらの神に光栄あらしめよ！　主はいわお。そのみわざは完全。その道はすべて正しい。主は真実の神であり、いささかの不義もない、正と義そのものである」(32・3〜4)と宣言しています。神の限りなき完全性を賛

音楽は普遍のことば

ヨーロッパ文化のおかたの母胎である教会は心を合わせて、三人の傑出した音楽家、バッハ、ヘンデル、ドメニコ・スカラッティを記念し、たたえます。彼らはあまねく知られた天才であり、その作品の一部を神への賛美としてささげた人たちです。とりわけ、バッハが自らの作品すべてに S. D. G. (Soli Deo Gloria) の文字を記していたことを忘れるわけにはゆきません。

2　音楽はおのおのの文化の豊かさをあらわしてあまりある程です。それのみか、本質からして音楽は、内的な調和をもたらし、深遠な強い感情を呼び起こして人を魅了する、大きな影響力をもっています。

人間の作った言葉を高めるにしろ、神から賜ったおことばにメロディーという衣を着せるにしろ、あるいは詞なしの音楽そのもので現われる場合でさえ、音楽は心の声として美の理想と、人間的な情念に左右されない完全な調和を求める願い、普遍的な一致への夢を呼びさましてくれます。その超越性からして、音楽は自由の表現でもあります。音楽は地上のいかなる権力者からも逃れ、精神にとってたとえ状況がどんなに絶望的で人間にのしかかってくるように思える時でも、完全な独立した隠れ家となるからです。音楽はそれ自体のうちに、すべての人が関心をもつ価値を秘めています。それゆえ名曲や傑作は、いつどこで生まれたものであろうと、人類全体の宝であって、個人や一国民の独占に限られてはいません。

3　日ごろ経験できるこのような特質をもとにして、音楽は他にもはかり知れない貢献をしています。コミュニケーションのための理想的なことばとして、互いに価値観を知るためのきっかけとして。また音楽は、互いに理解し高めあうという点で不可欠の条件です。

音楽は、つねにさまざまな人々、出身や言語、文化も考え方も異なる人々を結びつける上で、効果的な役目を果たしてきました。中世のグレゴリアン聖歌は、ヨーロッパの核心とも言うべき霊的・典礼的な伝統の一致をかため、強める助けとなりました。それは同時に、社会の一致のためにも否定できない役割を果たしたのです。同様に、ルネサンス時代に開花したポリフォリック(多声楽)形式は、全ヨーロッパに一つの音楽的インスピレーションをもたらし、国々の音楽家たちは、自分たちが言わば共通の国に属する市民であると考えるようになりました。それは文化・芸術の交流のおかげです。(…)

4　ジャンルを問わず、音楽は世界の共通語です。楽の音に人々の心は共鳴し、知性と感情をあげて、同胞愛の中へと一つにとけこんでゆくのです。

どのようなものであれ、人の心にしみとおる特別な力を持つという点で、音楽は、人の心を高め、可能性を最大限に広げる手段と言えます。

職業として音楽に身をささげるにせよ、その言い尽くせぬ美を楽しむにせよ、あらゆる人が音楽芸術にふれる機会を持つべきです。また、生涯を音楽にささげ努力を注ぎ込んでいる人々の才能の実りは、正当に評価されなければなりません。彼らの自由な音楽活動を保証し、その霊的かつ知的な才能を守るためにも。

このような責任は重大で、音楽に関わるすべての人々、すなわち作曲家、演奏家、聴衆、評論家の方々の善意を必要とします。

こうしてはじめて、音楽芸術はこれからも独自の霊的な特質を充分に表現することができるでしょう　それによって、詞の中身を高め、広げ、よりすぐれた効果を与えることができます。言葉そのものの理解を越えた時、音楽は歌声と楽器のひびきの流れとなって天の高みに上りつき、妙なる神的なハーモニーを鳴り響かせることでしょう。

5　ご存じのように教会は常に音楽を保護し養い育ててきました。音楽が共同体に豊かな活力を与えることを、よく知っているからです。教会はつねに音楽の保護者であり、霊的、文化的かつ社会的な面での音楽の重要性を熟知しています。さらに、昔から、典礼という最高のときに必ず音楽を取り入れてきました。こうして音楽は神に光栄を帰し、祈りを支え表現し、典礼に与る人々の魂を神に向かわせ、典礼の有する荘厳さを示す役割をになっています。従って典礼音楽は、演奏法や様式による区別なく、真の芸術であり、つねに聖なる神への礼拝に向かうものでなければなりません。

6　(…)このような理想を実現するためには、音楽的な素養や訓練をつむと同時に、霊的な訓練を受けることがどうしても必要になります。と言うのも、人は芸術からのみならず、信仰の光を受けて照らされ、神と親しくまじわりつつ生きるべきだからです。

音楽家の皆さん、とりわけ宗教音楽にたずさわっている方々は、歌声ばかりでなく、魂をも高めてくださいますように。

(八・六)

【ページ1から続く】

美するとは、神の知恵だけでなく、神の正義と誠実さ、つまり神の倫理的な完全性を賛美し告白することにもなるわけです。

6　山上の説教中、イエズス・キリストは、「天の父が完全であるようにあなたたちも完全な者になれ」と勧告なさいました。(マテオ5・48)この呼びかけは、神は完全である、神は「限りなく完全である」(第一バティカン公会議、文書資料集3001)と信仰告白するよう招くものです。

神が限りなく完全であるとは、イエズス・キリストの教えのなかに絶えず出てくることがらです。サマリアの婦人に「神は霊である……まことの礼拝者が霊と真理をもって御父を拝む時が来る…」(ヨハネ4・23～24)とおおせになったイエズスは、「よい先生」と尋ねかけた若者にお答えになるときには、「なぜ私を『よい』と言うのか。神御一人のほかよいものはない……」(マルコ10・17～18)と言い、意味深長な表現で御自分をお示しになりました。

7　神のみ善、神は無限の善性を所有しておられる。神はあらゆる善の充満であります。そして、神が存在の充満そのものであるごとく、すべての善の充満によって、神は善そのものであられます。神が善の充満であるとは、神の意志の限りない完全性に呼応するものです。それはちょうど、限りなく完全な神の知性と理知が真理の絶対的な充満に呼応するのと同じです。神の無限の善性は、神の知性、神の存在と同じなのです。神は無限に完全な霊であるゆえ、霊によって神を知る人々は神の真の崇拝者になります。彼らは霊と真理の中に神を崇拝する。

無限の真理の充満であり、無限の善であられる神は……「自ら広がり行くもの」です。(『神学大全』I, q. 5, a. 4, ad. 2)これによってもまた、神は御自身を啓示なさっています。啓示なさるのは、善にして真理である御方です。

御自分を啓示されたこの神は、得も言われぬ崇高な方法で御自身を与えるために、御自らを伝えることをお望みになりました。これこそ、契約の神、恩寵の神であります。

説教・講話・書簡等の抄訳

「悲しみの聖母の祈り」を黙想しよう

病、高齢、障害は教会と世界を浄める

九月八日(日)午後、リヒテンシュタインの首都ファドゥーツの聖フロリア教会で執り行なわれた教皇ミサに、病人、高齢者、身体障害者、司祭、修道会の神学生、そして敬虔な信徒らが参列した。教皇様はドイツ語でお話になった。

キリストにおける兄弟姉妹のみなさん。

1　「悲しみに沈める御母は涙にむせびて、御子のかかり給える十字架のもとにたたずみ給えり。」　つい先ほど歌われたばかりの「悲しめる聖母に対する祈り」の最初のことばがいま私たちの心の中でこだましています。旋律の心をうつ調子と詩的な言葉が、私たちを聖ヨハネが福音の中で告げる偉大な神秘へと駆り立てます。「イエズスの十字架のかたわらには、その母と、母の姉妹と、クロパの妻マリアと、マグダラのマリアが立っていた。イエズスは母と愛する弟子がそばに立っているのを見られ、母に『婦人よ、これがあなたの子だ』と言われ、また弟子には『これがあなたの母だ』と言われた。その時からその弟子は、マリアを自分の家に引き取った。」(ヨハネ19・25～27)

「これがあなたの母です。」　磔にされた主は、私たちにもこう話しかけていられます。このように主は本日のマリア生誕の祝日にあたり、ペトロ教皇座にある卑しいしもべの私を通して、とりわけ愛する病人、障害者、高齢者のみなさんに、語りかけておいでになる。主はいたるところ、ここ神の家で、病院で、国中の療養所で、みなさん方の家で、語りかけていらっしゃいます。みなさん自身、十字架にかけられた救い主の悲しげな表情と痛々しい御傷を見たことがおありでしょう。みなさんはもの言いたげに十字架を見つめます。虐待され、傷つけられた御体のかけられた十字架を。マリアと共に見つめる殉教者の木、それは、信仰の目で見てのみ「甘美な木」であり、「生命の木」とみなされます。キリストの福音を担う者として、私はみなさんのもとにまいりました。みなさんがご自分の運命をもまたこの信仰の目で見ることのできるように。ヨハネにならい、主の御母であるマリアを母として受け入れ、聖母を通して信仰の目を開いてください。マリアの助けを借りれば、病、障害、高齢といったみなさんの重荷は、ずっと軽いものになるでしょう。

2　マリアはみなさん方のそばに立っていらっしゃる。マリア自身、エルサレムの寺院で告げられた老シメオンの預言どおり、神である御子と苦しみを共にされたからです。「あなたの心も剣で貫かれるでしょう。」(ルカ2・35)　なじみの深い悲しみのマリアのご絵を私たちは心の奥深くに刻み込んでいますが、そこで神の御子のなきがらは、彼を生んだ母、悲しみにうちひしがれた御母のひざの上に横たわっています。マリアの母としての心は痛みで貫かれている、その方の御母ほど御子に近い者はいないから。けれども、天の御父は苦難のきわみにうちひしがれる人々をお見捨てにならず、イエズスの母マリアに、十字架のもとに忍耐づよくとどまり、御子の苦しみを分かちあうための強さをお与えになりました。

マリアの七つの悲しみの祈りを特別にささげることは、みなさん一人ひとりにとって、信仰の心で人生の重荷を受け入れ、祈りと黙想を通してその重さを主の苦しみと死とに結びつけるための力のみなもととなるでしょう。日々の圧迫や心配ごとを辛抱づよく忍ぶことによって、みなさんは自らを浄めると同時に、教会と世界をも浄めているのです。キリストのために受け入れるなら、苦しみはいつも恩寵のもととなります。みなさんは聖パウロの言葉をご存じでしょう。パウロ自身も多くの苦しみと逆境を耐えしのんできましたが、そのような苦しみがもたらす力について説明しています。「私はいまあなたたちのためにうけた苦しみをよろこび、キリストの体である教会のために、私の体をもってキリストの苦しみの欠けたところを満たそうとする。」(コロサイ1・24)　そうです、キリストを信じる者として、私たちは人間の苦しみのもつ目的と尊厳を理解し、それが生活のうちに息づくよう努めなければなりません。

3　キリスト信者にとって、病、障害、高齢の辛苦は、しかたなく受け入れねばならない悲惨な運命では決してないのです。それらは神の呼びかけであって、み心のあらわれにほかなりません。この神の呼びかけは、私たち仲間である人間が、保護と安全を愛しながらも苦しみを受け入れ、人々の病苦をあらゆる医療法を用いて和らげ、さらにできる限り治癒するよう訴えています。一方、病める人、障害をもつ人々には、実生活の中でキリスト信者としての使命を生き、自らの救いを成し遂げよと呼びかけているのです。

けれども医療の役立たない状況にあっては、キリスト信者の信仰のみが苦しみの暗い神秘への道を照らすことができます。キリストの福音は外的に障害を取り去ることをせず、かえって福音の意味の深い理解への道を開くことによって、障害に耐えられるようにしてくれるのです。最終的には、神の摂理によって許され、あるいは意図された苦しみの中で、私たちはまさにキリストご自身の死と復活という言い尽くしがたい神秘に出会います。十字架への道はまことに特別な弟子たちへの呼びかけです。外ならぬキリスト御みずから、弱さ、苦しみ、無力を、ご自身のくびき、ご自身につき従う道として受け入れよと、人間に勧めておいでになるのです。信仰の心で受け入れてこそ、苦しみはことごとく人間の存在の深いところで一変します。そうすることによりキリストの贖いの苦しみにみずから参与するからです。キリストは苦しむ人々の中にあってご自身の受難を続けていられます。

4　病める人、障害をもつ方々、高齢者のみなさん！　私はみなさんと共に祈っています。みなさんが苦しみや病をキリストの精神で勇ましく受け入れることのできるように。すすんで苦しみ犠牲となったキリストは、贖い主として死者のうちからよみがえられました。このようにしてはじめて、弱さはみなさんを圧迫するどころか、むしろ皆さんにとって自信とちからの源となるのです。キリストと共に苦悩と逆境を余すとこ

不変の教え

ろなく世界の救済のために差し出してください。みずからの人生と、皆さんが親類や友人たちの暖かい手助けを受けて生きている家庭や社会の浄化のうちに、苦しみの意味をたずねてください。神が日々新たにしてくださる辛抱と忍耐に感謝しましょう。仲間たちの愛情こもった奉仕のわざに感謝しましょう。

みなさんとご一緒に、すべての医師と看護婦の方々に心から感謝します。彼らは忠実、献身的に病める人びと、助けを必要としている人々のために力を尽くしていらっしゃる。そのような援助と愛が、ことごとく、究極的にはキリストに向けられているということをこの人々はわかっているのでしょう。「病気だったときに見舞ってくれた。」　キリストはさらに言葉をついで、「まことに私は言う。あなたたちが私の兄弟であるこれらの小さな人々の一人にしたことは、つまり私にしてくれたことである」(マテオ25・36、40)とおおせになりました。

愛する兄弟姉妹のみなさん、最後に、私が苦しみのキリスト教的意味に関する使徒的手紙の中で触れたことばをつけ加えたいと思います。「十字架のもとに立っていたキリストの母マリアと共に、私たちは同時代に生きる全ての人間の十字架のそばに立っています。あらゆる聖人たちに加護を求めよう。彼らは幾世紀も前に独自のやり方でキリストの苦しみを分かち合った人々であるから。彼らに助けをこい願おう。」　神が恩寵をそそぎ、みなさんを力づけ、守ってくださいますように。

5　他の参列者の方々にも心からあいさつ致します。リヒテンシュタイン司教区で司祭職についていられる皆さん。また、主の呼びかけに応え、福音の勧めに従う生活に入られた修道者のみなさん。そして、洗礼と堅信の恩寵を受け、この国の様々な司牧上の任務に協力していられる信徒のみなさん。

皆さんこそ、地方教会を支える決定的な力であり組織です。共同体内の宗教生活は、あなたがたの精神のバイタリティー、種々の仕事や義務にそそぐ真摯さと努力にかかっています。私がみなさんに感謝しますのも、皆さんが神の呼びかけに応えて、これほど寛大に、神の王国のために役立とうと努めておいでになるからです。そして同時に、キリストのみ名において、人々とみなさんの保護に委ねられた組織の自然・超自然の幸福のために、様々な活動を行なうことをお勧めします。

司祭、聖職者、あるいは責任ある信徒としての難しくしかも喜ばしい課題とは、ここ皆さんの国で、司教との一致のうちに、また司教の指導のもとで、キリストの生きた教会を建てることです。それゆえ第一にして最も高貴な務めは、人々にキリストへの道を示し、かつ全力をあげてキリストにおける「生命への目覚め」に向かうことと言えます。これは礼拝によって成されるかもしれませんし、あるいは、説教、あらゆる年齢層の人々への要理指導、困っている人々や国々への(または彼らと力を合わせて行なう)奉仕によってであるかもしれません。

6　キリストは皆さんを通して共同体内に救いを宣べ伝えようとお望みです。福音を広めるために、みなさんの話すことばが人知を越えた豊かな救いを伝えるよう、またその手足で迷子の羊をさがしに行くよう望んでいらっしゃいます。ですから、愛する兄弟姉妹のみなさん、あなたがたの中で行なわれる主の救いのみわざのままに自らを委ねてください。ちょうど主の御母マリアがなれかしによってそうされたように。「私は主のはしためです。あなたのおことばの通りになりますように。」(ルカ1・38)この従順な承諾をマリアは決して翻すことなく、むしろ十字架に至るまで御子とのさらに深い交わりのうちに生きてゆきました。こうしてマリアは私たちの信仰と奉仕のすばらしいお手本となったのです。

教会の御母マリアは、礼拝において特別な仕方でみなさんのそばにいらっしゃいます。教会とキリストのための努力は、この御母のすすめに従ってはじめて完全なものとなり、人類の救いにとって真に実りあるものとなるでしょう。「なんでもあの人の言うとおりにしなさい。」(ヨハネ2・5)　この勧めを、まずみなさんの実生活の中で、一人ひとりが回心と浄めというかたちで実行してください。まかされた務めを忠実に果たすことによって、人々の間で日々の勤めを行ないながら。主のおおせのままに。なぜなら、この世でみなさんを通して救いを成就することを望まれるキリストが、実際には御みずから教会の宣教によって救いを実現しておいでになるからです。

司祭、修道士、そして信徒のみなさん、あなたがたの信仰生活の模範と信心のわざのおかげで、ここリヒテンシュタイン司教区において、キリストの王国はより一層現実味をおびてきます。

最後にもう一度、朋友である病人、障害者、高齢者のみなさんに、与えられた苦しみを忍び、祈りと犠牲をささげることによって、この地の、ひいては世界中の教会の仕事を力のかぎり支えてくださるよう、心からお願いします。この教皇自身も、羊飼いの長としての勤めをみなさんの協力に頼っています。

何にもまして、収穫のときに十分な働き手を送ってくださるよう神に祈りましょう。こうして神のみ名が至る所でふさわしく称えられるために。イエズス・キリストのたたえられんことを！

赦しの秘跡

『和解と悔悛』より

第一の形式は告解者の個別の和解で、これが唯一、通常の司式の方法です。この個別の告白と個別の赦しを、廃止したり無視したりするようなことがあってはなりません。二番目は、赦しの秘跡を受けるために大勢の信者がいる場合。これは準備段階において、この秘跡の共同体的な面を明らかにするのに役立ちます。とは言え、秘跡の頂点となる個別の告白と個別の赦免という点では、第一の形式と何ら変わるところはありません。三番目の共同回心式、つまり一般告白と一般赦免を伴う形式は、その性質上、例外的なかたちです。したがって、第三形式にするか否かは、自由選択にまかされているのではなく、特別な規律で規制されています。(…)

第一形式は、その個別的性格のおかげで、本来ならば関係のないこと、つまり「霊的指導」と容易に関係づけることができます。(…)

(また)均合いのとれた霊的指導のためにすこぶる大切なのが、小罪しかなくても告解の秘跡を活用することです。これについては信者の皆さんにくり返し教え続けなければなりません。幾世紀もの間、伝承され、実践されてきた教えに基づいていることですから。

小罪は事実、告解以外の方法、たとえば痛悔、善行、祈り、回心式などによっても赦され、教会もそのように教えています。しかし、小罪しかない場合にもこの秘跡が格別に有効である事実を、たえず思い起こさせてきたのも確かです。ある信者の方々が実行しているように告解の秘跡にたびたび与かれば、たとえ些細な罪であっても、神を侮辱し、キリストの体である教会に害を与えることに変わりはないという事実を一層深く自覚できます。(…)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393